

競技スポーツにおけるコーチングの現状と課題  
—全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場へ向けての取り組み—

渋谷俊浩<sup>1)</sup>

Present Conditions and Tasks of Coaching in Athletic Sport  
—Road to SENDAI—

Toshihiro SHIBUTANI

Abstract

The sports circles in recent years, importance has been attached to symbiosis with champion sport, and recreation/healthy sport more than the former. In order to meet the demand of such society, “Biwako Seikei Sports College (BSSC)” was hung up over the concepts of establishment of “symbiosis of athletic sport and lifelong sport”, was home and was started as first college by which the name was entitled the “sports”. Since then, we are striving towards practice of a concepts every day.

On the department of athletic sport/coaching course in which it participates in the improvement in performance of athlete directly in such a situation, it becomes a proposition that it is required that leadership should be exercised and it accumulates the result of the practice steadily further as “A result (=performance improvement/competition results) which is a foregone conclusion”, always taking cooperation with other fields, in order to attain the purpose.

Then, how is the “athletic sport” so far caught and practiced from a viewpoint of coaching by BSSC ?

By this study, the “measure towards the participation in the Japan Inter-University Women’s EKIDEN Championship” of the women ekiden team which is one of the examples of practice of the “Athletic sport” of BSSC was taken up, and as soon as it mainly added examination from a viewpoint of coaching, the view was considered. And as a result, the knowledge which are unnecessary in order that a “Athletic sport” may embody the thing which is originally just going to aim at, and “which is both improved through the competition and game (in which it vies mutually/in which is-raised mutually)” was able to be acquired.

Key words : Athletic Sport, Improvement in Performance, Coaching, Practice, Women’s EKIDEN Team, Japan Inter-University Women’s EKIDEN Championship

---

1) 競技スポーツ学科

## I. はじめに

### 1. 本学のコンセプト

びわこ成蹊スポーツ大学が開学して3年が過ぎようとしている。思い起こせば2003年4月、本学は“(1) 競技スポーツと生涯スポーツの共生, (2) 自然環境とスポーツの共生, (3) 大学と社会・人との共生によって、新しいスポーツ文化の創造と深い理論と高度な実践力を備えた人材の育成を目指す”ことを開学のコンセプトに掲げ、国内で初めてその名に「スポーツ」を冠した大学として1学部(スポーツ学部)2学科(競技スポーツ学科・生涯スポーツ学科)の体制でスタートした。無論、これらのコンセプトに2000年9月に文部科学省(当時:文部省)が策定した「スポーツ振興基本計画」の3つの主要課題“(1) 生涯スポーツ社会の実現に向けた、地域におけるスポーツ環境の整備充実方策, (2) 我が国の国際競技力の総合的な向上方策, (3) 生涯スポーツ及び競技スポーツと学校体育・スポーツとの連携を推進するための方策を具体化すること”が反映されていることは言うまでもなく、以来我々は「競技スポーツ」と「生涯スポーツ」とを両輪として、コンセプトの実践に日々邁進し続けてきたのであるが、現在もその途上にあると言わざるを得ない。

### 2. 競技スポーツ学科・コースのコンセプト

近年のスポーツ界を概観してみると、“21世紀を迎えた体育・スポーツの状況は、競技性の濃淡をめぐって大きく2極分化(びわこ成蹊スポーツ大学設置認可申請書)”がますます進んでおり、チャンピオンスポーツに代表されるナンバー・ワン志向とレクリエーション・健康スポーツに代表されるオンリー・ワン志向との共生がこれまで以上に重要視されてきている。このような社会の要求に応えるためには、まさに本学のような取り組みが急務であり、前者については競技スポーツ学

科が、後者については生涯スポーツ学科が担うべき最重要課題となるはずである。そして、さらに論を進めるならば、競技スポーツ学科に配置された3つのコース(コーチング・技術コース, トレーニング・健康コース, マネジメント・情報コース)はまさに、2002年に日本オリンピック委員会が策定した「JOC GOLD PLAN (国際競技力向上戦略: カテゴリーONE・TWO・THREE)」が反映されたものであると言えよう。したがって、「JOC GOLD PLAN」に沿って考えると、コーチング・技術コースは「アスリートの競技力向上」に直接関与する部分を担い、その目的を達成するためには常に他の2コースと連携をとりつつ、リーダーシップを発揮していくことが求められているのである。加えて重要なことは、その実践の成果を「目に見える結果(=競技成績)」として着実に積み上げていくことこそが命題だということである。

### 3. 本学における「競技スポーツ」の実践

#### ①「競技スポーツ」のとらえかた

それでは、これまで本学ではコーチングの観点から「競技スポーツ」をどのようにとらえ、実践してきたのだろうか。

かねてより、「競技スポーツ」については、コーチ学以外にもスポーツ社会学の見地などから多くの研究者・諸機関によって、定義づけ・位置づけが行われてきた。それらによると、「競技スポーツ」とは“スポーツの中でも最も組織化・制度化されたスポーツの存在形態”, あるいは“歴史的・社会的に制度化された, ある一定のルールに従って競争するもの”(糸野ら)であるとされている。

また、JOC強化事業部は「指導者の義務と責任」の中で、「競技スポーツ」について“一定のルールにもとづいて、勝敗や記録を競い合い、新しいことに挑戦し、競技者同士が切磋琢磨することによって、スポーツの技術・文化がさらに磨かれ、高められていく。優秀な競技者, 特に海外の優秀な競技者と競

うことにより、競技者は一段と成長する”と意義付けている。

そもそも「競い合う」という要素はスポーツの本質のひとつであり、人間の本能に関わる部分でもある。したがって、スポーツという人間の活動とそれによって引き起こされる事象に対して取り組む場合、前述のような「競技スポーツ」の特性を十分踏まえたくうえで研究・実践を進めることが重要であると考えられる。

②実践例—陸上競技部・女子中長距離ブロックのコンセプト

本学では、開学と同時に多くのスポーツ課外クラブが創部された。その中でも陸上競技女子中長距離（駅伝）と男子サッカーの2種類の強化については、大学と担当者（クラブ

創部後、指導者となる専任教員予定者＝筆者ら）の意向を踏まえ、開学前の準備室の段階から中長期ビジョンを持って進められてきた。

このうち、筆者が担当する陸上競技部女子中長距離ブロック（以下、本学チーム）は、本学の前身である大阪成蹊女子短期大学（当時）の全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場（1—4・15回大会）、ならびに併設校である大阪成蹊女子高等学校の全国高校駅伝大会出場という輝かしい実績をうけ、創部当初からチームの主要課題のひとつとして「全日本大学女子駅伝対校選手権大会への出場」を学内外に公表し、前述の中長期ビジョン（＝表1：長期強化計画）に沿って活動を行ってきた。

また、2002年に日本陸上競技連盟が策定し

表1 陸上競技部 女子中長距離ブロック全日本大学女子駅伝大会出場へ向けた長期強化計画

| 西暦                | 2002   | 2003                           | 2004                                    | 2005                                | 2006   | 2007   | 2008  | 2009   | 2010   | 2011   | 2012   | 2013   |  |
|-------------------|--|--------------------------------|---|-------------------------------------|--|--|---|--|--|--|--|--|--|
| 和暦                | H14  | H15                            | H16                                     | H17                                 | H18  | H19  | H20   | H21  | H22  | H23  | H24  | H25  |  |
| 主要国際大会            | アジア大会<br>世界jr.   | 世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.         | アテネ五輪<br>世界jr.                          | 世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.              | アジア大会<br>世界jr.                               | 大阪世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.                           | 北京五輪<br>世界jr.                                     | 世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.                           | アジア大会<br>世界jr.                                   | 世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.                           | 五輪<br>世界jr.                                      | 世界ch<br>ユニバー<br>アジアjr.                           |  |
| 選手<br>の<br>推<br>移 | 高校3年   | 19                             | 20                                      | 21                                  | 22   | 23   | 24  | 25   | 26   | 27   | 28   | 29   |  |
|                   | 高校2年   | 高校3年                           | 19                                      | 20                                  | 21   | 22   | 23  | 24   | 25   | 26   | 27   | 28   |  |
|                   | 高校1年   | 高校2年                           | 高校3年                                    | 19                                  | 20   | 21   | 22  | 23   | 24   | 25   | 26   | 27   |  |
|                   | 中学3年   | 高校1年                           | 高校2年                                    | 高校3年                                | 19   | 20   | 21  | 22   | 23   | 24   | 25   | 26   |  |
|                   | 中学2年   | 中学3年                           | 高校1年                                    | 高校2年                                | 高校3年   | 19   | 20  | 21   | 22   | 23   | 24   | 25   |  |
|                   | 中学1年   | 中学2年                           | 中学3年                                    | 高校1年                                | 高校2年   | 高校3年   | 19  | 20   | 21   | 22   | 23   | 24   |  |
|                   | 小学6年   | 中学1年                           | 中学2年                                    | 中学3年                                | 高校1年   | 高校2年   | 高校3年  | 19   | 20   | 21   | 22   | 23   |  |
|                   | 小学5年   | 小学6年                           | 中学1年                                    | 中学2年                                | 中学3年   | 高校1年   | 高校2年  | 高校3年   | 19   | 20   | 21   | 22   |  |
|                   | 小学4年   | 小学5年                           | 小学6年                                    | 小学1年                                | 小学2年   | 小学3年   | 小学4年  | 小学5年   | 小学6年   | 高校1年   | 高校2年   | 高校3年   | 21   |
|                   | 小学3年   | 小学4年                           | 小学5年                                    | 小学6年                                | 小学1年   | 小学2年   | 小学3年  | 小学4年   | 小学5年   | 高校2年   | 高校3年   | 19   | 20   |
|                   | 小学2年   | 小学3年                           | 小学4年                                    | 小学5年                                | 小学6年   | 小学1年   | 小学2年  | 小学3年   | 小学4年   | 高校3年   | 高校2年   | 高校3年   | 19   |
|                   | 部<br>員<br>数  | ブロック全体<br>1年<br>2年<br>3年<br>4年 | 4~6 (4)<br>4~6 (4)<br>-<br>*( )内推薦<br>- | 7~11 (7)<br>3~5 (3)<br>4~6 (4)<br>- | ~15 (9)<br>~4 (2)<br>3~5 (3)<br>4~6 (4)<br>- | ~19 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (2)<br>3~5 (3)<br>4~6 (4) | ~17 (11)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (2)<br>3~5 (3) | ~16 (11)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (2) | ~16 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3) | ~16 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3) | ~16 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3) | ~16 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3) | ~16 (12)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3)<br>~4 (3) |
|                   | 大学   | 開学準備                           | 開学<br>創部, 1年                            | 1・2年                                | 1・2・3年                                       | 完成年度<br>全学年  |   | 5周年  |  |  |  |  | 10周年   |
| 大会                | 20回  |                                |   |                                     |  | 25回  |   |  |  |  | 30回  |  |  |
| 学園                |  | 70周年                           |   |                                     |  |  |   |  |  |  |  | 80周年   |  |
| 他                 |  |                                |   |                                     | 卒論<br>就職                                     | ⇒<br>⇒   | ⇒<br>⇒  | ⇒<br>⇒   | ⇒<br>⇒   | ⇒<br>⇒   | ⇒<br>⇒   | ⇒<br>⇒   |  |
| 活動<br>目標          | 基盤作り<br>部員獲得   | 基盤作り<br>(予選出場)<br>個人の活躍        | 基盤作り<br>予選出場<br>個人の活躍                   | 基盤作り<br>予選出場<br>国内大会                | 予選突破<br>全国出場<br>15位<br>国内大会                  | 予選突破<br>10位<br>国際大会へ                               | 予選突破<br>6位<br>国際大会へ                               | シード校<br>3位<br>国際大会へ                              | 上位定着<br>優勝争い<br>国際大会へ                            | 上位定着<br>優勝争い<br>国際大会へ                            | 上位定着<br>優勝争い<br>国際大会へ                            | 上位定着<br>優勝争い<br>国際大会へ                            |  |
| 課題                | ・選手勧誘の問題・衣食住（下宿・合宿所、自炊）の問題・種目特性、能力差の問題・トレーニング環境の問題<br>・医科学（ドクター、トレーナー）サポート、コーチの問題・就職、進学の問題・地域、既存機関との連携の問題、etc. |                                |   |                                     |  |  |   |  |  |  |  |  |  |

\* 「競技スポーツ学誌論」 p.77資料より渋谷改編

た「21世紀構想」では「競技力の向上と選手強化」について、“国際競技力向上による成果は、社会に向けての「表現」であり「顔」でもあり、競技団体としての中心的課題である。”と明記されている。すなわち、このことを本学の女子中長ブロックに当てはめるならば、“全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場（＝国際競技力向上による成果）”は、“陸上競技界・地域社会・本学へ向けて「アピールすること」「フラッグシップとなること」（＝社会に向けての「表現」「顔」）”であり、本学チームにとってはもちろんのこと、本学の「競技スポーツ」に対する取り組みの中心的課題であると換言できるのではないだろうか。

以上のことから、本稿は本学の「競技スポーツ」の実践例のひとつである女子中長ブロックの「全日本大学女子駅伝大会出場へ向けての取り組み」を取り上げ、主にコーチングの観点から評価検討を加えるのと同時に、その展望について考察するものである。

## II. 全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場へ向けての取り組み

### 1. 全日本大学女子駅伝対校選手権大会の概要

1983年11月23日、当時高まりつつあった女子長距離会の機運に乗り、学生競技者のパフォーマンスや国際感覚を向上させることなどを目的に、第1回の全日本大学女子駅伝大会（以下、全国大会）が大阪市を舞台として、国内外から招待された23チーム（日本学生陸上競技連合の招待による海外7チーム・国内16チーム）の参加によって、国際色豊かに開催された。ちなみに、第1回優勝はカリフォルニア州立サンディエゴ大学、記録2時間5分17秒（6区間35km）であった。以降、大会は拡大傾向をたどり、参加チーム数も一時は30チームにもものぼった（第5回大会より）。

当時としては大学女子スポーツでは唯一のテレビ生中継であったことに加え、地元関西地区代表チームが活躍した（大阪体育大学1984・85年優勝、京都産業大学1994～97年優勝）ことで、“関西地区（＝地元）20%前後・関東地区10%を越えるほどの、同時期に放映されるスポーツ番組と比較して特に高い視聴率を示した”（山地ら、1994）とも報告されている。さらに、1990年の第8回大会から「対校選手権大会」と銘打たれたことにより、一段と競技色が強まっていった。その結果、当大会出場選手の中からユニバーシアードをはじめ世界選手権やオリンピックなど（有森裕子：日本体育大学、高橋尚子：大阪学院大学、早狩実紀：同志社大学、その他多数）、国際大会レベルで活躍できる競技者を多数輩出するまでに発展したのである。

以上のことから全国大会は陸上競技界のみならず、社会的にも認知された大会に発展したことをうかがい知ることができる。また、そのような状況を生み出した背景には、「駅伝」という日本独自のスタイルを持つ競技に対して根強く高い人気があること、そのため他の陸上競技の種目と比較するとマスメディアによる報道が顕著に多いこと（渋谷ら、1998）、さらにはこれらの傾向が出場各チームにとっては自大学の膨大な広報・宣伝効果になるという付加価値的な要素を期待できることなどが含まれていることも、合わせて考慮する必要があると考えられる。

その後の関西地区代表チームの成績を見ると、1997年以降優勝こそ関東地区代表チーム（城西大学：1998・2000年、筑波大学：1999・2001・2002年）に奪われていたが、複数のチームが着実に上位入賞を果たしてきた結果、立命館大学の2003・2004年の2連覇や佛教大学・京都産業大学の上位入賞などに結びついている。このように、開催地区代表チームの競技レベルは全国的に見ても非常に高く、このことが全国大会出場を目指す関西地区所属の各大学の競争をより厳しいものにし

ているのが現状である。

しかしながら、その一方では近年の社会状況の悪化に加え、参加チームの競技レベルの低下（特に総合順位下位チーム）、優勝争いをするチームが限られてきたことなどのマイナス要因による影響で、全国大会自体の全体的な質は低下・沈滞傾向にあったことは否めず、抜本的な改革が望まれていた。

そして2005年、スポンサーの交代などを経て、「全国大会」は宮城県仙台市にて全6区間39kmのコースにおける「杜の都駅伝」として装いを一新し、第23回目を迎えるに至ったのである。当大会では、3連覇を目指した立命館大学は名城大学（東海地区代表）に敗れ、惜しくも優勝は成らなかったが2位と健闘し、以下関西地区代表チームは4位：京都産業大学・6位：佛教大学・8位：大阪体育大学と4チームが入賞を果たした（参加26チーム）ことから、依然関西地区の競技レベルの高さは維持されているものと考えられる。

## 2. 関西学生対校女子駅伝競走大会の概要

1991年10月6日、兵庫県神戸市六甲アイランドにおいて第1回関西学生対校女子駅伝競走大会（以下関西予選）が、18チームの参加により開催された（6区間18.5km）。当時、関西学生陸上競技連盟の出した声明には“本大会は、全国8地区学生陸上競技連盟に先立ち、近年著しい成長を見せる女子中・長距離界の更なる発展と選手諸君の競技力向上を目的として開催されるものである”とあり、前述の「全国大会」が前年から競技性を強めたことに、全国大会開催地区学連としていち早く対応しようとしたことがうかがえる。

その後大会は、参加選手の競技力が向上したことから、「全国大会」へ向けての強化の意味を含めたコース距離の延長（18.5km⇒30km前後、全国大会は35km以上で行われるため）や開催地の変更（六甲アイランド⇒神戸しあわせの村：1999年第9回大会より）

を経て、今年で15回目を迎えるに至った。当大会のこれまでの歴史を振り返ると、競技成績では京都産業大学（優勝8回）・立命館大学（優勝6回）・佛教大学（優勝1回）の3大学が他を圧倒しており、その競技レベルは前項で述べたとおり全国でもトップクラスである。

また、このような全国レベルの強豪チーム、全国大会の常連チームなどに加え、関西予選に参加するチームはさらに増加傾向にあり（前は本学、今回は大成学院大学など、次年度も新規参入の情報有り）、全国大会出場枠を賭けたボーダーライン上の争いはますます険しいものになることが予想される。

## 3. 全国大会へ出場するための条件

### ー選抜のしくみ

全国大会に出場するためには関西予選を突破しなければならない。現行の大会規則では、全国大会へ出場するための条件として“関西予選の成績により、全国大会のシード権を持つ大学を除く上位校に出場権を与える”（関西学連）とされている。つまり、今年度であれば2004年の全国大会で6位に入賞した立命館大学・佛教大学・京都産業大学の3チームはすでに2005年大会のシード権を獲得しており、今年度の関西予選では指定枠7からシード3チームを除いた4つの枠を各チームで争うというしくみである。実際の関西予選（18チーム出場）ではシードチームが上位3位を占めたため、4位の神戸学院大学・5位の大阪体育大学・6位の人間科学大学・7位の龍谷大学が全国大会への出場権を得た。

なお、本学チームは初出場の昨年が14位、本年は10位であった。

## 4. 予選通過チームの分析ならびに本学チームとの比較

次に、さらに踏み込んで、「それでは、どのようなチームが関西予選を勝ち抜くことができるのか」、また「関西予選を勝ち抜いた

チームは、どのような取り組みを行っているのか」ということの詳細な知見を得るために、本稿では以下の2つの方法を用いた。

まず第1の方法は、「関西予選が現コースでの開催となった2000年以降のプログラム・大会結果（関西学連）をもとに、各大会における予選通過チームのプロフィールを分析する」こと、そして第2の方法は各チームの全国大会出場へ向けての取り組みについて、「2000年大会以降毎年のように全国大会への出場権を争っている（関西予選において10位以内）8チームを対象に、各チームの指導者（直接チームを指導している監督・コーチ）に対して電話による聞き取り調査を行う（調査期間は2005年10月9日の関西予選終了後、12月までの2ヶ月間であった）こと」である。それぞれの方法の分析・調査項目を設定した根拠、ならびにその内容を以下に示す。

第1の方法について、分析項目は「全国高校駅伝資料」（全国高等学校体育連盟、以下高体連）などを参考に、①競技力（走行タイム）、②形態的特性（体格＝身長・体重・BMI）、③地域特性（選手の出身高校所在地）、④学年構成の4項目とし、対象は関西予選に実際に出場した選手（各年30～42名）とした。

第2の方法について、調査項目は「JOC GOLD PLAN」の競技者強化プロジェクト、および「21世紀構想」・「競技者育成プログラム策定に向けてートップ競技者の育成を目指して」（日本陸上競技連盟、以下日本陸連）

を参考に、⑤スタッフの構成（コーチングの体制）、⑥トレーニングの環境（施設など）、⑦タレントの発掘（選手勧誘・入学試験制度など）、⑧競技のサポート体制（費用面）の4項目を主軸とした。（表4参照）

以上の方法から得られた知見をもとに、「関西予選を勝ち抜くことができるチーム」の特性・共通点などを探り、本学チームの現状と比較検討することによって、本学チームの「全国大会出場」の可能性を模索する。

#### ①競技力について

関西予選は神戸しあわせの村（市立福祉施設・公園）内の陸上競技場（400m、土）を発着点・中継点とする1周約2.9kmの周回コース（アスファルト）において、1区間3～6kmの全6区間30km程度のコースで行われる（2005年は1区3.9km、2・5区3.3km、3・4・6区6.5km、計30km）。陸上競技場以外のコースの大部分が傾斜地であり、全体的に非常に起伏に富んでいる。そのため、このようなコースで平坦地でのレース（トラックレースなど）と同等のパフォーマンスを発揮するためには、適切かつ豊富なトレーニングに裏づけされた高い競技力（特に走力）が必要であることが推測される。

表2に、2000年以降の現行コースにおける予選通過チームの走行タイムの推移を示した。それによると、各年のレースコンディションには差があるにもかかわらず、走行タイ

表2 現行コースにおける予選通過チームの走行タイムの推移

| 開催年月日       | 総距離<br>(km) | 予選通過<br>チーム数<br>(シード) | 予選通過<br>(1km平均)  | 1位<br>(1km平均)    | ボーダー<br>(1km平均)  | 備考(レースコンディション)                       |
|-------------|-------------|-----------------------|------------------|------------------|------------------|--------------------------------------|
| 2000.10.01. | 30.3        | 7                     | 1:47:17 (3.32.4) | 1:41:52 (3.21.7) | 1:50:31 (3.39.0) | 晴れ:25.7~26.5℃:64.0~61.0%:北北西1.7~2.9m |
| 2001.10.06. | 30.3        | 7                     | 1:47:17 (3.32.4) | 1:41:42 (3.21.4) | 1:53:38 (3.45.0) | 晴れ:23.0~22.5℃:55.0~44.0%:北6.5~2.3m   |
| 2002.10.05. | 29.9        | 5 (2)                 | 1:43:30 (3.27.6) | 1:40:28 (3.21.6) | 1:45:32 (3.31.8) | 晴れ:26.0~27.5℃:58.0~56.0%:西2.0~1.2m   |
| 2003.10.04. | 29.9        | 5 (2)                 | 1:42:11 (3.25.2) | 1:40:38 (3.22.2) | 1:44:04 (3.28.8) | 晴れ:23.0~24.0℃:60.0%:北東1.2~1.0m       |
| 2004.10.09. | 29.9        | 6 (3)                 | 1:43:04 (3.27.0) | 1:39:40 (3.20.0) | 1:47:36 (3.36.0) | 曇り:22.0~23.0℃:68.0~63.0%:北東3.5~1.8m  |
| 2005.10.08. | 30.0        | 7 (3)                 | 1:43:34 (3.27.0) | 1:40:16 (3.20.5) | 1:45:44 (3.31.2) | 雨・曇り:23.1~24.0℃:92%:北北東0.7~0.2m      |

|             |      |     |                  |
|-------------|------|-----|------------------|
| 2004.10.09. | びわこ大 | 14位 | 1:58:35 (3.57.9) |
| 2005.10.08. |      | 10位 | 1:52:03 (3.44.1) |

\* 神戸しあわせの村周回コース (12:00スタート)

ムは一定、もしくは若干ではあるが年々向上する傾向にあることがわかる。つまり、本学チームが関西予選を突破し全国大会に出場するためには、レースコンディションの如何を問わず、起伏に富んだ30kmのコースを1時間45分以内（1km平均3分30秒以内）で走りきる能力を身につけることが必須の条件であると考えられる。ちなみに、本学チームは

2005年大会において、1時間52分03秒：1km平均3分44秒1であった。したがって、本学チームが上記の条件をクリアするためには、単純計算で選手1人平均1分10秒以上のタイム短縮が要求されることとなる。非常に厳しい条件ではあるが、このように選手に対して具体的な目標（タイム）を設定することは、コーチングおよびトレーニングの方向性

表3 予選通過チームの選手の体格

|         | 年    | 人数             | 平均身長<br>(SD)   | 最大            | 平均体重<br>(SD)  | 最大            | BMI<br>(SD)   | 最大   |
|---------|------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------|
|         |      |                |                | 最小            |               | 最小            |               | 最小   |
| 予選通過チーム | 2000 | 42             | 158.3<br>(4.3) | 168.0         | 45.4<br>(3.9) | 55.0          | 18.1<br>(1.2) | 20.0 |
|         |      |                |                | 149.0         |               | 39.0          |               | 16.0 |
|         | 2001 | 42             | 159.0<br>(4.9) | 172.0         | 46.0<br>(4.2) | 59.0          | 18.2<br>(1.2) | 21.0 |
|         |      |                |                | 150.0         |               | 40.0          |               | 16.2 |
|         | 2002 | 30             | 158.6<br>(4.2) | 169.0         | 45.3<br>(4.0) | 54.0          | 18.0<br>(1.3) | 21.6 |
|         |      |                |                | 149.6         |               | 38.0          |               | 16.2 |
| 2003    | 30   | 159.0<br>(4.3) | 171.0          | 44.7<br>(4.3) | 53.0          | 17.6<br>(1.2) | 20.3          |      |
|         |      |                | 146.0          |               | 38.0          |               | 15.4          |      |
| 2004    | 36   | 159.0<br>(5.5) | 172.0          | 45.3<br>(4.1) | 53.2          | 17.9<br>(1.1) | 20.1          |      |
|         |      |                | 146.0          |               | 37.4          |               | 16.0          |      |
| 2005    | 42   | 159.6<br>(5.8) | 172.0          | 44.9<br>(6.4) | 53.5          | 17.9<br>(1.0) | 20.3          |      |
|         |      |                | 148.0          |               | 37.0          |               | 15.6          |      |
| 本学      | 2004 | 6              | 160.5<br>(6.3) | 165.0         | 48.5<br>(6.1) | 56.0          | 18.8<br>(1.5) | 21.6 |
|         |      |                | 148.0          | 38.0          |               | 17.3          |               |      |
| 2005    | 6    | 162.3<br>(3.4) | 166.0          | 50.2<br>(2.9) | 54.0          | 19.0<br>(0.7) | 20.3          |      |
|         |      |                | 156.0          |               | 48.0          |               | 18.3          |      |

表4 関西予選上位チームに対する聞き取り調査の結果

|          | チーム    | a    | b     | c  | d    | e   | f | g   | h   | BSS |
|----------|--------|------|-------|----|------|-----|---|-----|-----|-----|
| スタッフ構成   | 監督     | 2    | 1     | 1  | 1    | 2   | 2 | 2   | 1   | 1   |
|          | コーチ    | 1    | 3     | -  | -    | -   | - | 1   | 1   | -   |
|          | マネジャー  | 4    | 1     | 2  | 1    | 1   | 1 | 1   | 3   | (2) |
|          | トレーナー  | 1    | -     | 1  | 1    | -   | 1 | 1   | -   | (1) |
|          | ドクター   | -    | -     | -  | -    | -   | - | -   | -   | -   |
|          | その他    | -    | -     | 1  | 1    | -   | - | 1   | -   | -   |
| トレーニング環境 | トラック   | ○    | ○     | ○  | ○    | ○   | △ | ○   | ○   | ○   |
|          | ロード    | ○    | ○     | ○  | ○    | ○   | ○ | ○   | ×   | ○   |
|          | クロカン   | ×    | ×     | ×  | △    | △   | △ | △   | ×   | △   |
|          | その他    | ○    | △     | ○  | ○    | △   | ○ | ○   | ○   | ○   |
| 合宿       | 回数/年   | 4-5  | 6     | 3  | 3    | 4   | 2 | 3   | 3   | 3   |
|          | 日数/回   | 7-10 | 14-21 | 10 | 7-10 | 4-7 | 7 | 3-6 | 4-5 | 5   |
| タレント     | スカウト活動 | ○    | ○     | ○  | ○    | ○   | ○ | ○   | ×   | ○   |
|          | 入学制度   | ○    | ○     | ○  | ○    | ○   | ○ | ○   | ○   | ○   |
| 競技のサポート  | 学費の減免  | ○    | ○     | ×  | ○    | ○   | - | ○   | ×   | ×   |
|          | 奨学金制度  | ○    | ○     | ○  | ○    | △   | - | ○   | ○   | △   |
|          | 強化費    | △    | ○     | ○  | ○    | ○   | × | △   | ○   | (△) |
|          | 合宿所・寮  | △    | ○     | ○  | ×    | ○   | ○ | ×   | ×   | ×   |

\*監督欄「2」は総監督1名、監督1名を表す

\*○=有り、×=無し、△=一部有りを表す

を明確にする有効な手段のひとつであると考えられる。

### ②形態的特性について

表3に各年度の出場選手の形態的特性(体格=身長・体重・BMI)を示した。それによると、予選通過チームの平均身長は158~159cm前後(最大172.0cm, 最小146.0cm), 平均体重は44~46kg(最大59.0kg, 最小37.0kg), BMIは17~18(最大21.6, 最小15.4)であり、本学チームの平均身長は160~162cm前後(最大166.0cm, 最小148.0cm), 平均体重は48~50kg(最大56.0kg, 最小38.0kg), BMIは18~19(最大21.6, 最小17.3)であった。

このことから、予選通過チームについては、一般女子学生や他種目の女子競技者と比較すると、“女子駅伝選手(女子中長距離女子選手)はかなりの痩身である”(宮広ら, 1998)という、これまでの多くの研究・報告と同様の傾向が見られたが、その一方で本学チームは予選通過チームと比較して、長身ではあるが身長に対して体重が多いことが見て取れる。加えて、本稿では取り上げなかったが、体組成に関する内部データ(トレーニングによる体重・体脂肪率の変動: 渋谷, 未発表資料)などを加味して考察すると、本学チームの形態的特性は、体脂肪の増加(体脂肪率17~30%)による体重過多であることは明らかであり、コーチングおよびトレーニングの改善などの適切な対処が必要である。

また、このような「女子長距離選手の身体組成」と、前述した「競技力(パフォーマンス)」や「トレーニング」との関連性については従来から研究が進められてきており(豊岡, 1999; 石川ら, 2004ほか)、今や「競技力(パフォーマンス)と体脂肪率の間には高い相関がある」(満園ら, 1994ほか)ことは定説となっている。つまり、女子長距離・駅伝競技においては「体が軽ければ(体脂肪重量が少なければ)速く走ることができる」ということなのである。したがって、昨今行わ

れている女子長距離・駅伝選手のトレーニングにおいて量的な側面(走行距離・時間など)に特に重点が置かれている事例を見受けるが、高い競技力を獲得・維持するためにはやむを得ない傾向であるとも考えられる。

しかしながら一方では、このようなトレーニングの傾向と並行してさまざまな問題が発生していることを見逃すことはできない。その顕著な例が、不適切な減量・ウェイトコントロールによって引き起こされる身体的・精神的障害(貧血, 骨粗しょう症, 摂食障害など)である。(石田ら, 1995) 残念ながら、これらの障害は本学チームにおいても散見されるが、(トレーニング量の増大・厳しい体重制限などによってもたらされる)競技力の向上と障害が発生する危険性とは紙一重のところにあるのも事実であり、実際のコーチングにおいてコントロールするのが非常に難しい部分でもある。今後の継続的な課題とすべきであろう。

### ③地域特性について

図1に各年度の出場選手の出身高校所在地の内訳を示した。地域を区分するにあたっては、後述するスカウト活動の状況なども加味したうえで、全国インターハイの地区予選を参考に9つのブロック(北海道, 東北, 関東, 北信越, 東海, 近畿, 四国, 中国, 九州)に分け、新たに留学生を加えた10区分を設定した。それによると、チーム構成は各年を通して関東以西の地区出身者に偏っており(北海道・東北地区は出場者無し)、近畿地区の占める割合が圧倒的に高く(66.7~91.7%), 次いで中国・四国地区の割合が高いという傾向を示した。また、最も出身者の割合の高かった近畿地区の内訳を見ると、経年的に京都府・兵庫県出身者の割合が高く、次いで大阪府が高い傾向にあり、本学チームも同様の傾向であった。

このような傾向が生れる背景として、都道府県対抗女子駅伝大会や全国高校駅伝大会に



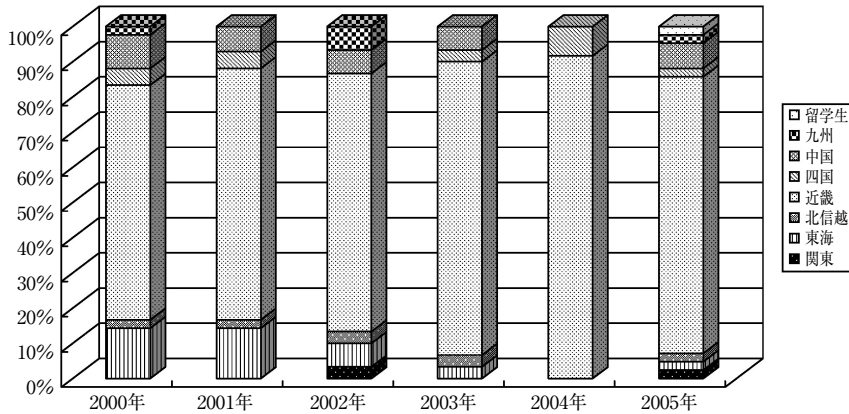


図1-① 予選通過チーム選手の出身地

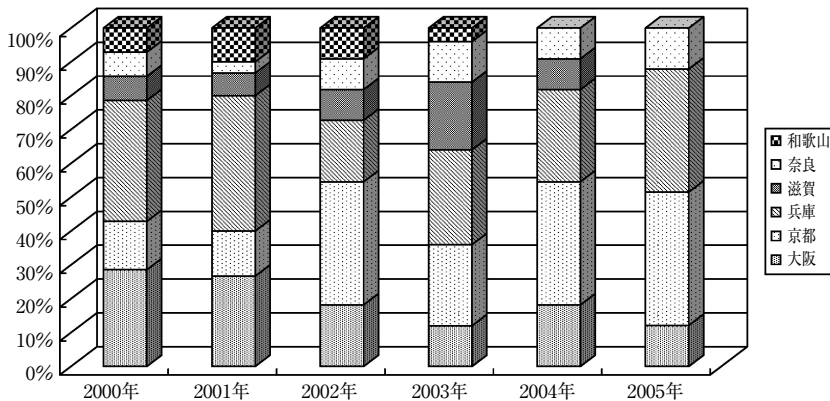


図1-② 近畿地区出身選手の内訳

見られる近畿勢を中心とした西日本チームの活躍があること、つまりは高い競技レベルと豊富な競技人口を基盤として、送り出す側（高校）と受け入れる側（大学）双方の体制が充実していること（提携校，併設校）などが挙げられる。この点では男子の傾向とは若干異なり、「箱根駅伝・関東へ」と言われるような流れに、ある程度の歯止めが掛かっていることが推測される。

④学年構成について

図2に各年度の出場選手の学年構成を示した。それによると、チーム構成は各年を通して下級生（1・2年生）の占める割合が高く、上級生（特に4年生）の占める割合は低かった。また、本学チームも同様の傾向であった。

本来であれば、即戦力レベルで入学してきた選手（詳細は⑦で述べる）は、学年が進むにつれて競技経験や競技に関するさまざまな知識が増える、トレーニングが充実するなどして競技力が向上するはずであるが、高校生時代とのギャップ（高校は3年間であるが大学は4年間であること、生活・トレーニング環境が変化することなど）、学業・学校行事との両立、前述の身体的・精神的障害の発生、または他の何らかのこと（アルバイト、就職活動など）が原因で競技力が低下し、下級生に正選手の座を奪われるケースが目立っている。コーチの立場から考えると、コーチングにより多くの時間を割いた上級生（3・4年生）を中心としたチーム編成をすることが望ましいのであるが、現実的にそのようなバラ

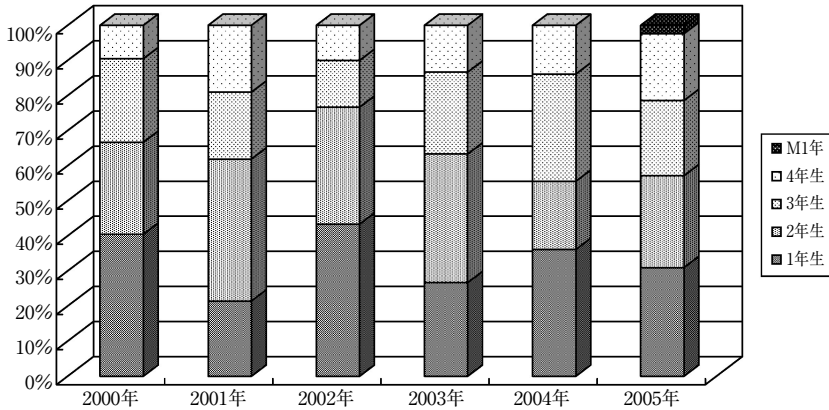


図2 予選通過チームの学年構成

ンスをとることは困難で、コーチングの現場において大きなひずみとなっている。

#### ⑤スタッフの構成について

駅伝へ向けて、チームの強化に直接関わる（コーチング、その他サポーティング）スタッフの構成を調査した。それによると、コーチングの面ではいずれのチームも監督（関西学連規則、一部のチームは総監督も置いている）・コーチを置き、コーチングの専門スタッフがチームを直接指導する体制をしいていた。一部学外スタッフを招聘しているチームもあるが、監督・コーチのほぼ全員がその大学の教職員であり、可能な限りコーチングスタッフのいずれかが、常時チームを指導できるような工夫がなされていた。

このような傾向は、従来からの報告にもあるように、“女子選手は男子選手と比較して、指導者（コーチ）への依存心が強い”（永井，1995；その他）ことを如実に表しているものと思われる。つまり、これまで女子選手に対して行われてきたコーチングの経緯・特性は、強化計画の立案（plan）・レースやトレーニングの実施・日常生活（do）・結果の評価検討（check）など、特に競技と関連性が高い部分は選手の自主性に任せるのではなく、コーチングスタッフがほとんどの部分を管理・コントロールしているところにあるの

である。もちろん、一般的にコーチングが目指すところのひとつとして、「自己管理能力の高い競技者」を育成することが上げられるが、実際には女子の場合、前述のようなコーチングを受けたチームのほうが高い成果（特に競技成績）を挙げる例が圧倒的に多い。

また、（筆者も同様であるが）大学教職員の職務はチームや選手の強化だけではなく、授業（実習などを含む）・研究・学校業務（会議、入学試験その他）などの重要な業務もあることから、コーチングに充てることのできる時間にはかなりの制約があるのが現状である。

「常にみていてほしい」選手と「常にみていたい（コーチングしたい）」ののだが制約があるコーチ、この両者の思惑と現実とのギャップがそれぞれのジレンマ・フラストレーションを生む原因のひとつであることは想像に難しくなく、「理想のコーチング」と「女子選手に対するコーチング」の問題を含め、これらの課題については今後さらに研究を進めていく必要があると考えられる。

その他のスタッフでは、全チームがマネージャー（学生、タイムキーパー・事務処理などに専念）を置き、監督・コーチがコーチングに専念しやすいよう配慮していた。トレーナー（学生）については駅伝チーム専属という形態は見られず、他競技・多種目との併用

が主であり、ドクターについても専属は無かった。また、一部ではトレーニング・フィジカル面やメンタル面の専門家（例：フィジカルコーチ、メンタルトレーナーなど）と提携しているチームもみられた。

このように、ほとんどのチームではそれぞれの専門分野による役割分担が進んでいるが、本学チームでは未だそのようなシステムは構築されていない。したがって、本学チームにおいても学内連携（他コース、他分野、他種目）などの工夫をすることによって、コーチングの効率化を図ることが急務であると考ええる。

#### ⑥トレーニングの環境について

各チームが普段トレーニングを行っている環境を、施設の状況などから調査した。

それによると、1チームを除いてトラック（多目的グラウンドを含む）を所有しており、そこを主体としてトレーニングを行っていた。特に、市街地に拠点を持つチームはトレーニング場所の確保に苦慮しており、付近の道路（河川敷など）や公園を利用するなどの工夫をしていた。同様に、近年注目されているクロスカントリートレーニングについても、施設の有無・施設までの移動の問題などがあり、十分には導入されていないことが考えられる。その他の施設（屋内のトレーニングルームなど）については、ほとんどのチームが定期的に利用できる状況であった。

加えて、上記のような普段のトレーニングの不足分を補う意味も含めて、各チームとも年間に3回程度の合宿（1回5—7日程度）を行っていた。その中でも、関西予選上位チームは年間3—6回（1週間～3週間、高地合宿・海外合宿含む）行っており、競技成績と合宿の状況には相関があることが推測される。

一方で、本学チームは、普段のトレーニング環境には恵まれている（3種公認全天候トラック6レーン、ナイター照明、ロードコー

ス、トレーニングルーム、温水プールなど）。しかし、諸種の問題（冬期の気候＝強風・積雪、授業時間・カリキュラムなど）からそれらの施設を使いこなせておらず、合宿についても長期休業中（夏期2回・春期1回、それぞれ5日間）に行っているが、やはり集中講義や実習などの制約があり、その効果は決して十分とは言えない。したがって、本学チームのような状況の場合、トレーニングの密度を高める（短時間に集中して行う）、トレーニングのレパートリーを豊富に準備する（同じ施設でも異なる内容で行う）などの対策が必要であると思われる。

#### ⑦タレントの発掘について

チーム強化のため、有望な選手をどのようにして獲得しているのかを、スカウティングと入学制度の状況から調査した。この2点は分析項目①～④の結果からもわかるように、「大学女子駅伝チームの強化」に直結する極めて重要なポイントであると考えられる。（スタッフや施設が充実していることに加え、競技力が高く将来性のある有望な選手を獲得する必要がある）

まず、スカウト制度についてはほぼ全チームが導入しており、その活動（大会視察、学校・練習訪問など）には監督・コーチがあたっていた。過去においては、全国大会レベルの競技力でないとスカウトの対象とならない例が多かったが、近年は大学・高校女子長距離（駅伝）界の現状（選手の進学希望の偏り、需要と供給のアンバランス＝競合チームの増加など）を踏まえ、「県大会・地区大会以上の競技力を持った選手」・「コーチングスタッフが将来性を認めた選手」など、条件をゆるやかにして対処するチームが増加する傾向にある。このように、近年ではスカウティング能力もコーチにとって必要不可欠な資質となりつつあることがうかがえる。

次に、スカウトした選手の大学への入学についてであるが、すべてのチームにおいて推

薦入学制度を導入していた。それぞれ名称は若干異なるが、競技力（記録・主要大会での成績や活躍度など）を重視した、いわゆる「スポーツ推薦（入学試験）」である。今回は、それらの制度の詳細までは調査できなかったが、各チームとも概ね3～5名の「スポーツ推薦枠」を持っており、他の受験生よりも優先的に入学できるシステムをとっていた。加えて、ほとんどの「スポーツ推薦」スタイルの入学試験は、他の入学試験よりも早期に実施されるため、トレーニングの継続・競技力の維持などの「競技」的な側面からみると、このシステムは受験生（選手）およびチーム（コーチ）の両者にとって非常に有効なもの（選手：進学先が早く決まり競技に集中できる、コーチ：競技力の高い選手を早期に確保できる）であると考えられる。しかしながら、その一方では一部の競技力の高い選手に複数チームが競合することによって、過度なスカウト活動が行われることへの懸念、あるいは進路があまりにも早期に決まるため、選手がモチベーションを維持するのが難しいなどの問題点を孕んでいることも、十分念頭に置いて対処することが重要である。

本学チームにおいても、概ね上記チームと同様のスカウト活動・入学制度を導入しており、開学初年度の2003年には4名（AO入試）、2004年—3名・2005年—2名・2006年—3名（以上スポーツ推薦入試）の、計12名を同システムで獲得した。各種大会でのスカウト活動、および高校のクラブ顧問からの紹介などによる結果であるが、獲得した選手の高校時代の競技力を見ると、予選上位通過チームが獲得している選手と比較して、まだまだレベルが低い（3000mのベストタイムで見ると、30秒から1分の差）のが現状である。したがって、今後本学チームが競技力の高い（即戦力・将来性）選手を獲得していくためには、高校生・クラブ顧問・保護者などを対象に、本学チーム・選手の競技力（タイム・レースでの順位）向上による、これまで以上に積極

的なアピールを行っていくことが必要であると考えられる。

#### ⑧競技のサポート体制について

チームの強化をサポートするためにどのようなことが行われているのかを、特に経済的な側面から調査した。

それによると、選手個々に対しては、ほぼ全チームが入学金・授業料などの学費の減免（数十パーセント～全額免除まで、競技力により割合は異なる）、奨励金・報奨金などの奨学金システムを導入していた。（いずれか一方、または両方など）さらに、ほとんどのチームがなんらかのかたちで強化費的（合宿費・遠征費・栄養費など）な金銭的サポートを受けていた。特に、一部のチームではチーム自体が各大学の強化クラブ指定（各大学によって、対象種目やクラブ数などは異なる）を受けており、その場合のサポート費用の額は膨大なものであることが推察される。

加えて、半数近くのチームが寮・合宿所（チーム専用・他競技などと共用）を持っており、「食・住」環境面でのサポートにもポイントが置かれていた。

一方で、このようなサポートシステムを持たないチームの学生競技者の場合、通常の学費・生活費以外に競技に関連する経費（登録料・参加料・交通費・宿泊費・食費・消耗品代など）は当然のことながら各個人で負担しなければならないことから、大学入学後も競技を継続するにあたっては、またその選手の競技力が向上すればするほど（＝より上位の試合・遠征のチャンスが出てくるうえに回数も増加する）、本人と保護者にかかる経済的負担が相当大きくなることは明白である。大学チームのコーチの立場から考えると、学生競技者は学業と競技に専念（集中）することが本来望ましいのであるが、上記のような状況の場合、アルバイトなどで補うことを認めざるを得なくなるケースが多々見うけられる。

同様に、本学チームもこのようなサポートシステムを持っておらず、競技にかかわる費用のほぼ全額は個人負担となっている。したがって、たとえコーチとして選手の競技力向上のために有効な試合・合宿であると判断・計画したとしても、それらを実施するにあたっては多くの制約を受け、計画の変更・断念を余儀なくされているのが現状である。

### Ⅲ. まとめと展望

今回、本稿では「競技」・「競技スポーツ」について、本学における実践例として女子駅伝チームをとりあげ、調査・分析によって得られたいくつかのデータを通してコーチングの観点から考察を加えた。

その結果、本学チームが全国大会に出場するためには、次のような課題・問題に取り組む、解決していく必要があることが示唆された。

- ①現有選手の強化（走力の向上 = 1 km平均 3分30秒以内、セルフコントロールの浸透・徹底、トレーニング内容の再考、施設の有効利用など）
- ②有望選手の獲得（スカウト活動の充実、高校との連携システムの構築・整備など）
- ③サポートシステムの構築（コーチングスタッフの充実、他コース・学科との連携、外部資金の獲得も念頭に置いた活動資金の捻出など）

このように、現状のままでは本学チームが全国大会に出場することは決して容易ではないかもしれない。しかしながら、あえて本学チームが置かれている、必ずしも恵まれているとは言い難い状況・境遇をもって「全国大会出場」への取り組みを続けていくことは、まさしく本学における「競技スポーツ」の実践を具現化するひとつの方法であり、ひいては本学全体のコンセプトの達成につながっていくものと確信している。

いずれにせよ、びわこ成蹊スポーツ大学が

「競技スポーツ学科」という名称を掲げるのであれば、また「競技スポーツ」を追及するのであれば、その実践を伴うことが必要不可欠である。すなわち、「競技スポーツ学科 コーチング・技術コース」における研究・教育の成果は「競技力向上」および「より高い競技力の獲得」であり、はっきりと目に見える形で表現すべきものである。決して結果主義・勝利至上主義を推し進めているのではない。「競技スポーツ」が本来目指すところである「互いに競い合う、高め合う」ことを通じて、「ともに向上する」ことの具現化にチャレンジしているのである。

いよいよ次年度に完成を迎えようとしている今、本学では「競技スポーツ」に関する研究・教育の成果がいくつか形を成し始めている。それは、個々の選手・教員の国際的・国内的活躍であったり、チームの上位リーグ昇格であったりと、その形態・種目・レベル・進行速度などはさまざまではあるが、たとえゆっくりであったとしても着実に一步一步前進しているのである。

最初にも述べたように、本学は未だ発展の途上にある。近い将来、「スポーツ」の世界において、本学が「競技スポーツの実践」というアクションを通じ、常にスポーツ界の先駆者であらんことを祈念して本稿のまとめとしたい。

おわりに、本研究を進めるにあたり、びわ湖大学駅伝の開催などの多忙中にもかかわらず協力いただいた関西学生陸上競技連盟のスタッフ各位、ならびに聞き取り調査にてかなり踏み込んだ内容まで公表していただいた各チームの監督・コーチ諸氏に、改めて謝意を表します。ありがとうございました。

### 引用・参考

- C.L. ウェルス著 宮下充正監訳 (1999) 女性のスポーツ生理学 大修館書店。

- 石田良恵・鈴木志保子・角田直也ほか（1995）大学女子長距離ランナーの身体特性と骨密度の関係，体力科学，44：874.
- 石川敬史・松生香里・豊岡示朗（2004）大学女子長距離選手の追跡的研究：1年間のトレーニングによる記録と生理学的指標の変化，陸上競技紀要，17：20-29.
- J. W. ムーア著 松田岩雄・藤善尚憲・安田昭子・猪俣公宏訳（1990）スポーツコーチの心理学，大修館書店.
- 関西学生陸上競技連盟 関西学生対校女子駅伝競走大会プログラム 1991-2005.
- 関西学生陸上競技連盟 インターネットホームページ.
- 勝田 隆著 河野一郎監修（2003）知的コーチングのすすめ：頂点を目指す競技者育成の鍵 大修館書店.
- 宮広重夫・三宅勝次・金丸キミエ・新畑茂充（1998）総説：駅伝ランナーの体格，陸上競技研究33：24-35.
- 宮下充正監修 山下ゆかり編（2004）女性アスリート・コーチングブック，大月書店.
- 文部科学省（2000）スポーツ振興基本計画.
- 永井 純（1995）国際セミナー報告：長距離女子競技者における大学への導入期についての諸問題，陸上競技研究，20：18-23.
- 日本学生陸上競技連合・豊岡示朗ほか（1999）第16回全日本大学女子駅伝対校選手権大会，国際セミナー要約：女子長距離ランナーのトレーニング管理について，陸上競技研究，36：44-49.
- 日本学生陸上競技連合 インターネットホームページ.
- 日本オリンピック委員会（2001）JOC GOLD PLAN.
- 日本オリンピック委員会（2001）競技者育成プログラム策定に向けて.
- 日本陸上競技連盟（2002）21世紀構想.
- 日本陸上競技連盟（2002）陸上競技の競技者育成プログラム策定に向けて：トップ競技者の育成を目指して.
- 日本陸上競技連盟・全国高等学校体育連盟 全国高校駅伝プログラム・予想データ資料集（2003-2005）.
- 日本体育協会 C・B級コーチ教本
- 大阪成蹊学園（2002）びわこ成蹊スポーツ大学設置認可申請書.
- 洪谷俊浩（2004）コーチング・技術コースで学ぶこと，びわこ成蹊スポーツ大学，競技スポーツ学科：競技スポーツ学試論，pp.21-32.
- 洪谷俊浩・佐々木秀幸・松磨浩・永井純・大庭恵一・矢野龍彦（1998）マスメディアにおける陸上競技の報道傾向，陸上競技研究，11：10-23.
- 山地佳寿美・永井純・関岡康雄・清水茂幸（1994）全日本大学女子駅伝対校選手権大会の競技面から見た10年史①，陸上競技研究，16：22-28.
- 山地佳寿美・永井純・関岡康雄・清水茂幸（1994）全日本大学女子駅伝対校選手権大会の競技面から見た10年史②，陸上競技研究，17：28-36.